

校内研究概要

1. 研究主題について

「感じたこと・考えたことを、自信を持って伝え合う子どもの育成」
サブテーマ ～質の高い言語活動を通して～

研究教科等 教科等 (全領域で)

2. 主題設定の理由

中央教育審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月17日）で、言語活動の充実の答申を行っている。本答申において言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であるとされている。このため、各教科等において言語活動を充実する際には、このような言語の果たす役割を踏まえた指導を行うことが大切である。また、言語活動が単に活動することに終始することのないよう、各教科等のねらいを言語活動を通じて実現するために意図的、計画的に指導することが重要である。そこで今年度は各教科、領域において、このねらいを明確にした質の高い言語活動に着目し取り組んでいく中で子どもたちの思考力、判断力、表現力を育成し、感じたことや考えたことを自信を持って伝え合う実生活で生きて働く言語力を身に付けさせたいと考え、本主題を設定する。

本校は平成17年度より滋賀県教育委員会の「国語力向上事業推進校」の地域指定を受け、平成17・18年度は国語科を中心に、また平成19年度は音楽科を中心として、各教科における国語力の向上を目指し研究を深めてきた。過去3年はその取り組みを土台として、研究教科を全教科領域等に広げ、さらなる子どもたちの言語力向上を目指し、特に子どもに身につけさせるべき基礎・基本の力「聞く・話す・書く」に焦点を当て「聞く力・話す力・書く力」の育成を目指す指導法のあり方を追究してきた。

授業改善部では、子どもたちが、自分の言葉で表現できるように、視覚的な支援・ワークシートの活用・ポイントを絞って書かせる活動の効果的な取り入れ方について研究を進めてきた。また、国語力系統表を研究授業の指導案に生かし、それぞれの単元で特につけたい国語力を明確にし、授業研究で検討し深めてきた。その結果、系統表にある国語力を身につけさせるための効果的な手だてを探ることができた。また、「伝え合うための基礎的な技術の習得と興味・関心の向上、支持的風土の育成」の3側面を学習の場の中心に据え実践することにより、子どもたちの考えを伝え合う力を伸ばすことができた。そこで今年度は各教科、領域においてねらいを明確にした質の高い言語活動を取り入れることにより、伝え合うことで自分の考えを深められるようにしていきたい。

言語環境部では、言語感覚を磨く環境作りに取り組んだ。「語彙を増やす活動」として、

言葉集めや国語辞典を活用した意味調べを充実させ、言葉のイメージを豊かにすることができた。また、考えを伝え合う基礎的な技能を習得させるため「あすなろっ子の聴き方、話し方」を掲示して意識付けたり、詩や言葉を掲示して言語に関心を持つ環境づくりに取り組んだりした。言語に親しみ、読みの声を鍛えるために「全校集会での音読発表・『ことばの宝石箱』の暗唱」にも取り組んだ。その他にも、小さな詩人たち事業への取り組みにより、言葉に思いをこめて表現することの楽しさを味わう姿が見られた。今年度もこれらの取り組みを継続し、「気持ちを言葉に乗せ人に伝える。そして、相手の言葉とともに気持ちを感知取る態度」を育てていきたい。

図書館教育部では、子どもたちの語彙や表現が豊かになることをねらいとして、朝の読書タイムの充実（担任交換の読み聞かせ）、他団体との提携、読書資料の充実、教師によるお薦め図書の紹介、学校図書館資源共有ネットワークによる図書資料の活用などの取り組みを行ってきた。子どもたちの読書への関心が高まり、語彙が増え、表現力も高まってきた。さらに子どもたちの語彙や表現を豊かにするために、適切な教材を取り上げること、教育活動全体を通じた読書活動を推進すること、学校図書館を計画的に利活用することなどにも留意していきたいと考える。

3. 研究の仮説

各教科、領域においてねらいを明確にした質の高い言語活動を取り入れていけば、子どもたちの思考力、判断力、表現力を伸ばすことができるであろう。

質の高い言語活動とは、活動自体が目的となるものではなく、各教科等の目標を実現する手立てとして行われるものであり、課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力や多様な観点から考察する能力などが育成できる活動である。

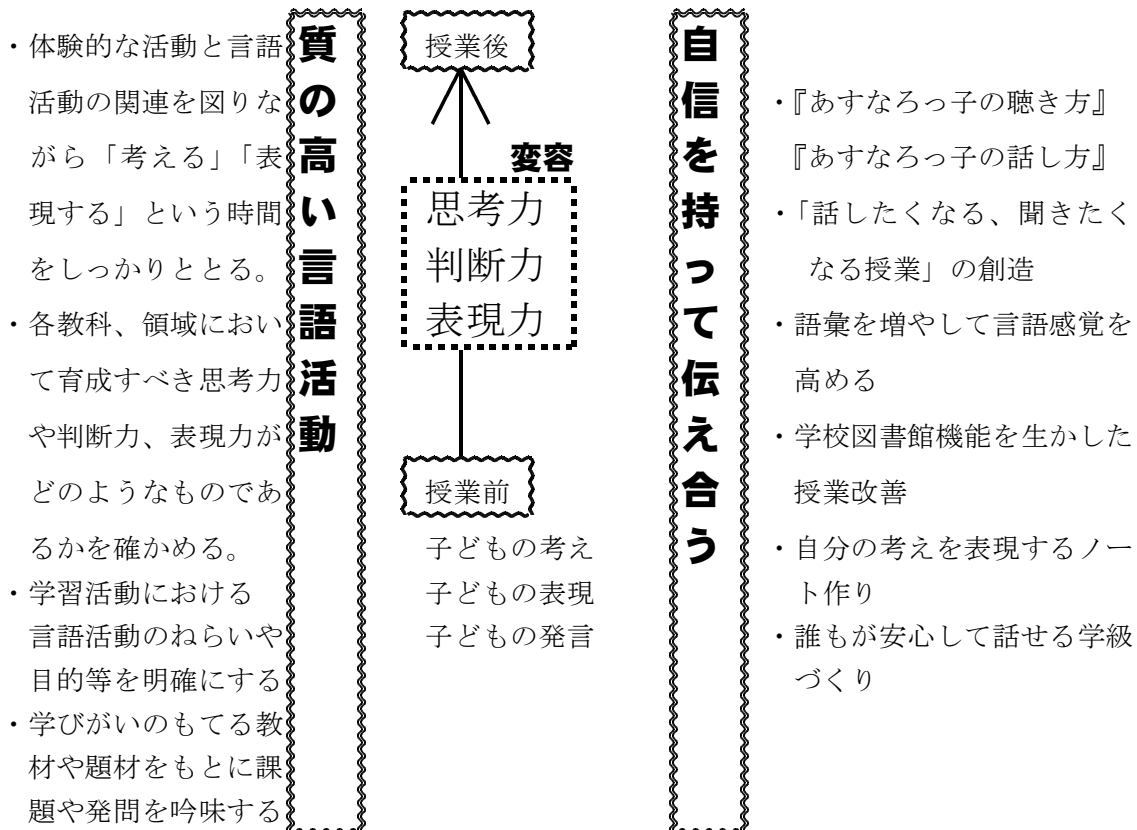
例えば以下のような活動が考えられる。

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を正確に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。

自信を持って伝え合うことにより、自分の考えを深め、さらに集団の考えを発展させることができるであろう。

考えを伝え合うことは、自分の考えになかったものを受け入れて自らの考えに生かしたり、相手の立場や考えを考慮し、尊重することで自らの考えや集団の考えを発展させることにつながる。

集団の中で児童がそれぞれの考えを自信を持って伝え合うことを通じて、いろいろなものの見方や考えがあることに気付き、それぞれの考えの根拠や前提条件の違い、特徴などを捉えることができる。また、それぞれの考えの違いや特徴を確認し合いながら、それらの考えを整理することを通じて、更に自分や集団の考えを振り返り、考えを深めることができる。



4. 研究の内容

- ・各教科、領域におけるねらいを明確にした言語活動の探究 **【授業改善部】**
【苫北小言語活動のバリエーションを求める。(低、中、高)】
- ・学校図書館機能を生かした授業改善
- ・語彙を増やし言語感覚を高める取り組み、豊かな言語環境の整備 **【言語環境部】**
【子どもの言語生活に豊かさと確かさを求める。】
 - 1 『ことばの宝石箱』の活用事例
 - 2 ノート指導の事例（1～6年）
 - 3 家庭学習プラン（低、中、高）
- ・読書活動の充実 **【図書館教育部】**
【子どもと図書情報とのつながりを求める。】
 - 1 総合的な学習の時間の単元に活用できる図書リストの作成（3～6年）
 - 2 国語科の単元における発展読書に使える図書リストの作成（1～6年）
 - 3 図書資料を活用した学習ノートづくりのポイント例の作成

5. 研究の方法

- (1) 研究主題に迫るために、単元構成・学習材の工夫、ねらいを明確にした言語活動の探求、見取りと支援などに力点を置いた授業を構想し、実践的研究に努める。
- (2) 授業研究会を中心にすえた研究を推進する。研究授業を行い、分析をして、今後の授業づくりに生かしていく。
- (3) 授業改善部・言語環境部・図書館教育部の3つの研究部に分かれ、豊かな言語力をつけるための方策を研究していく。

6. 具体的な方法

- (1) 研究授業をする。
 - ・各学年および特別支援学級1本（計7本）の指定授業をする。全員参加の授業研究会をする
 - ・全員公開の授業をする。〔事前に指導案（A4 1枚程度）を配布する〕
〔年間計画をたてておく〕〔可能な範囲で参観する〕
 - ・実践後、成果と課題を見出す。
- (2) 研究先進校に学ぶ機会をつくる。
- (3) 市教委・県教委・教育センター等の事業や研修に参加する。
- (4) 図書・研究物等、文献研究を進める。
- (5) 教師全員の実践事例を研究紀要に残し、実践研究のまとめとする。

7. 研究計画

- ・授業研究会・・・各学年・特別支援学級各1本（指定授業）
（人権・同和教育授業研究会、学校図書館の有効な活用に関する授業を含む）
 - 5月（1年） 6月（5年） 7月（6年、4年）
 - 10月（2年） 11月（3年）
 - 1月（みのり）
- 【研究のまとめ 2月】

8. 研究組織

